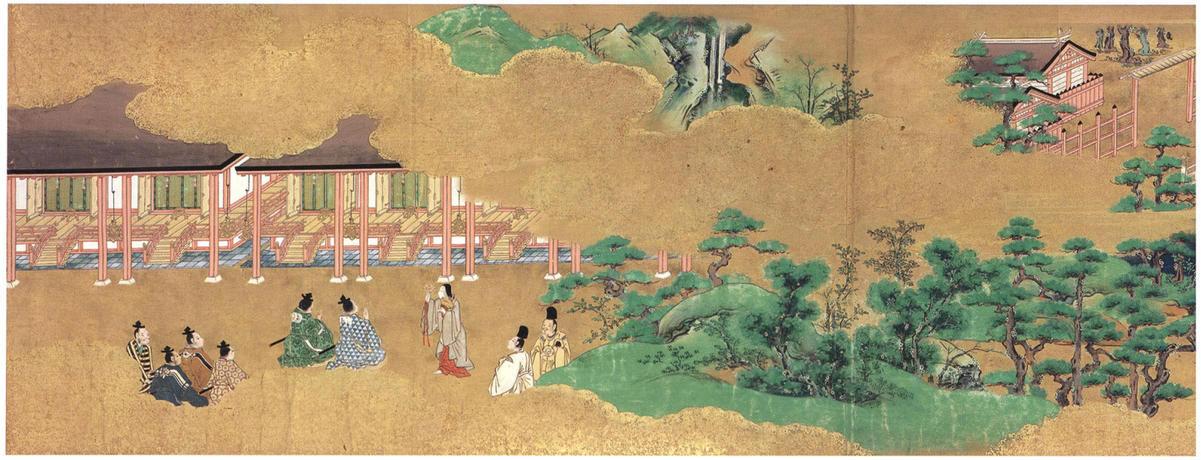


頼光らはそれぞれに八幡、住吉、熊野に参詣して、鬼退治の成功を祈願する　第1巻 第5段

酒伝童子絵巻

五巻のうち　紙本着色　江戸時代（十七世紀）

平安時代の武将、源頼光（よりみつ）（九四八～一〇二二）は、後に優れた武人として、様々な武勇伝が語られた人物である。実際には、但馬等の受領を歴任し、内蔵頭、左馬権頭、東宮権亮等を務めた。受領歴任で蓄えた財力で、道長の土御門殿新造の折の調度の品々の一切を負担するなど、藤原摂関家に接近して勢力を拡大し、後の清和源氏発展の基礎を築いたが、その武勇伝は伝説の域を出ない。

頼光や、彼の郎党と伝えられる渡辺綱、坂田公時、碓井貞光、卜部末竹の頼光四天王の名は、『今昔物語集』をはじめとする多くの説話集や軍記物の中に見出すことが出来、早くからその武勇が語られていたことが分かる。その武勇伝には、大江山の鬼退治として知られ、御伽草子によって広く普及、本絵巻の題材にもなっている『酒呑（伝）童子』（能の『大江山』も同）、『平家物語』剣巻の山蜘蛛退治を題材とした《土蜘蛛草紙》がある。

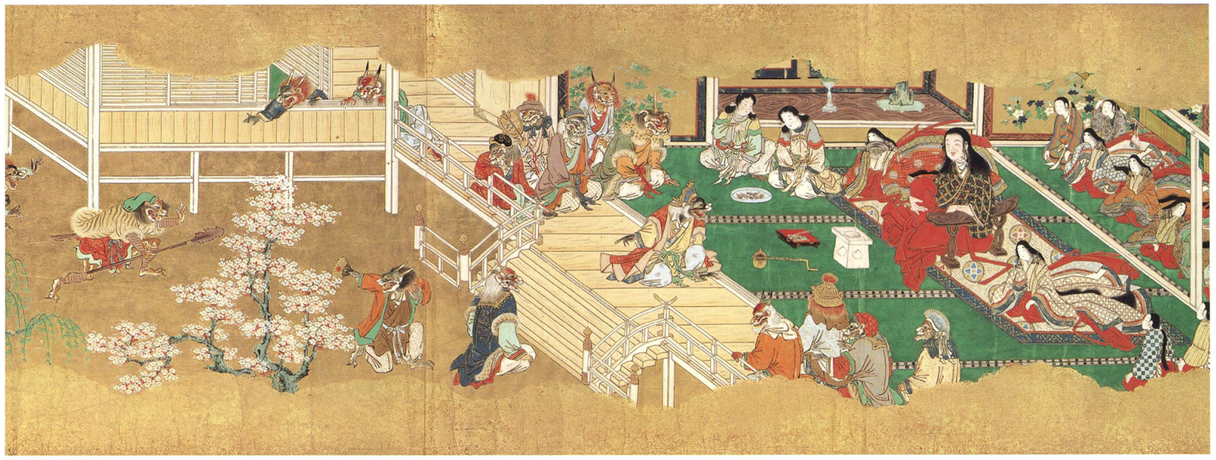
さて、本絵巻は、伊吹山系の作品で、狩野元信による三巻本の内容を受けて制作されたものである。詞書、絵場面共に金を多用し、鮮やかな色彩で描く豪華な絵巻である。画風から、その制作は京狩野に連なる絵師によるものと推察され、類似の画風が指摘される石山寺本《源氏物語絵巻　末摘花》等の絵巻群よりは先行する、十七世紀半ばよりやや早い頃の作例かと考えられる。その豪華さから、本絵巻は大名クラスの高位者からの依頼によって制作されたものであろう。物語の展開は次のようである。

一条天皇の時代、京で若く美しい女房が姿を消すという事件が相次いで起こった。池田中納言の一人娘もある夜姿を消してしまう。中納言は京で評判の清明の占いによって、事件は近江伊吹山の千丈ヶ嶽に住む鬼の仕業と知り、源頼光に討たせることとした。そして勅命を受けた頼光は、藤原保昌と家来の四天王と共に、八幡社や住吉社等に加護を祈願した後、山伏姿に変装して、伊吹山を目指して出発した。鬼の館に着いた頼光一行は、童子姿の鬼と対面し、自分たちは出羽国羽黒山の山伏であると名乗る。そして、童子に怪しまれないように人血酒や人肉のもてなしを受け、返礼に毒酒を勧めて舞い踊る。やがて童子は酔いつぶれて寝所に戻り、眷属の鬼たちも倒れ伏した。頼光らは二人の女房に童子の寝所に案内され、鬼の姿で横たわる童子の首を掻き切る。そして、眷属の鬼たちを次々に倒して、岩屋にとらわれていた中納言の娘たちを救い出し、京に連れ帰った。物語の最後は、頼光らの偉業を讃え、これらは神仏の加護によるものと締めくくる。

絵巻は、元信本の描写を受けて再構成されているが、頼光をはじめとする登場人物の表情や細緻で美しい装束の文様、屏風などの調度の品々の見事な描写、架空の鬼の豊かな描写など、美しさと共に、観る者が画面に描かれた様々な描写を愉しめる。描写の細緻さ、美しさが、豊かなイメージを膨らませているとも言えよう。

本絵巻は、日清戦争の折の明治二十七年、広島大本営に御逗留中の明治天皇に、因州池田家当主、池田仲博より献上された作品である。

頼光らはそれぞれの武具を笈に入れ、出立の準備をする　第1巻 第6段



酒伝童子の館内。都よりさらってきた女房を侍らせ、多くの眷属を従え、四方四角には春夏秋冬を飾っている　第2巻 第7段

頼光一行、酒伝童子の寝所を襲い、討ち果たす　第4巻 第4段

頼光一行、童子の首と助けた女たちを連れ、都に凱旋する　第5巻 第6段

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

絵巻を愉しむ ―《をくり》絵巻を中心に
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 69

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十七年七月四日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan